

---

# 三人の犯罪者

奈森咲良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三人の犯罪者

### 【Nコード】

N2255BA

### 【作者名】

奈森咲良

### 【あらすじ】

東京湾の近くに駐車されていた車から男性の遺体が発見される。警察は自殺と判断するが……。

## プロローグ（前書き）

新連載です。感想、評価お待ちしております。

## プロローグ

乗客の足を促す様に駅構内に鳴り響く発車ベルと駅員のアナウンスを聞きながら土橋は改札機を抜け今か今かと発進を待っている列車へと走っていた。この列車を逃せば次は三十分後だ。しかも三十分後に来る列車は各駅停車で、急行なら十五分程度で着くものが四十分もかかってしまう。今日は一刻も早く家へ帰って体を休めたい気分なのだ。

土橋は警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策五課に所属する警察官である。組織犯罪対策部は読んで字の如く組織的な犯罪を取り締まったりする部署で、暴力団事犯等も彼等の担当となることが多い。土橋は今年で四十になるが、警察官になってこれまで大きな手柄を立てたことはない。だが土橋自身としては自分の働きがもっと評価されても良いはずだと常々思っていた。自分は今まで仕事を何よりも優先し、家族という代償を払って日本警察の為に尽力してきたつもりだ。しかし、自分の働きは何時までも評価されはしない。最近じゃ年下の男に階級で上をいかれてしまった。屈辱的だった。見返してやりたい。自らの存在を警察に認めてもらいたい。土橋は何時しかそんな考えを持つようになっていた。

\*\*\*

自宅からの最寄り駅である緑台駅に着いたのは午後十時頃だった。何とか列車に乗り込むことが出来て、遂今し方到着したところだ。駅から自宅のマンションまでは歩いて十分程。土橋はその道のりを重い足取りで歩きだそうとしていた。

(……ん)

駅を出たところでふと土橋は足を止めた。視線の先には二人の男女が居て土橋の視線には気づいてはいない様子だ。

(……どうして)

土橋はしばらくそこに立ちすくんでいたが、やがて男女が歩き出すと自然と動き出していた。男女は土橋の自宅とは正反対の方向へ歩いていくが、土橋の足は躊躇なく男女の後を追っていた。早く帰宅しようとしていたことなど既に頭には無かった。

## 第一章・警察官の死（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

## 第一章・警察官の死

東京湾から車で十分程走ったところに「バリー」という名の洋食屋がある。そこが金山優子の勤務先であった。金山が「バリー」でアルバイトとして働き出したのは二年前、彼女が二十歳の時である。

「バリー」は彼女の自宅から車ですぐの場所にあり、更に給与もそこそ良いとあって求人広告を見た金山は即決でここを勤務地として選んだ。元々接客には慣れていたので仕事もすぐに覚えられたし職場の雰囲気も悪くない。金山は「バリー」が好きだった。

今日十月十日は金山が掃除当番の日であった。当番の人間は開店前誰よりも先に店に入り店内の掃除をしなければならぬのだが、この作業がなかなかしんどいもので一週間に一度の当番の日は少し憂鬱な気分になるところが正直なところある。掃除当番は二人一組制。金山が店に着いた時関係者専用駐車場に既に車が一台止まっていたのでもう一人が既に来ているのだと思い、彼女は少々急ぎ足で店の裏口へと歩いていった。

「あれ？」

てつきり鍵が開いているものだと思っただアノブに手をかけた金山だったが思いに反して扉は開くことを拒んだ。どうやら鍵が閉まっているらしく、何度かガチャガチャと動かしてみても扉は開かない。妙に思いながら金山がバックから鍵を取り出そうとした時、後ろから車のクラクションが聞こえてきた。金山がそれに反応して振り返るとそこには既に到着していると思っただアノブの一人の当番の女性が車で出勤してきたところであった。

「おはようございます」

車から降りてきた女性が挨拶をした。彼女は金山より二つ年上で名前は日村という。とても真面目な女性だ。

「おはようございます。日村さん、今来られたんですか？」

「え？ええ。そうですよ」

変なことを聞く。という顔を日村はした。

「私、てっきりあの車が日村さんの車だと思って、もう来てらっしゃるんだと思ってました」

そう言われて日村は駐車場入り口付近に止められている黒の車に目をやった。

「あれ、あの車金山さんのじゃないんですか？」

「違いますよ。私のはあっちです」

「……じゃあ、あの車誰のなんでしょう」

ここは関係者専用の駐車場である。基本的には店で働く人間しかここには止めないのだが、今日この時間には自分達しか来ていない筈だ。一体誰が止めているのだろう。

と、その時金山が車の中に誰か乗っているのに気がつく。運転席で眠っている様子だ。二人は好奇心に駆られ車に近づいていった。

「誰か寝てますよ」



車内では中年の男性が運転席で眠っていた。二人共面識はない男性だ。金山が運転席の窓ガラスをノックして男性を起こそうとしたのだが男性に反応は見られない。やがてじっと男性を見ていた日村の顔がだんだん青ざめていった。

「……………金山さん。こゝこの人、息してませんよ」

「えっ？」

二人は思わず反射的に車から離れていた。

\*\*\*

警視庁捜査一課に出動命令が出たのは午前八時前のこと。ちょうどその時出勤してきた高木渉は一息つくまもなく部下の大山と現場へ直行することになった。

警視庁捜査一課強行犯捜査三係の警部である高木渉は今年三十三歳。六年前に結婚し、現在五歳になる娘も居る。ただ刑事という職業柄、あまり一緒に居てやれる時間は少ないのだが娘がそれに対する文句を言ったことはなかった。五年前、娘が生まれてすぐに高木の妻・美和子は交通事故でかえらぬ人となり以来高木は男手一つで娘を育ててきた。母親が居ない寂しさもきつとあるはずなのに娘がそれを口に出すことはない。そういうところは母親にそっくりだった。

「警部、着きましたよ」

大山に言われて高木は我に帰った。既に車は現場に到着していて周りにはパトカーが数台止まっており物々しい雰囲気醸し出してい

る。二人は車から降り立ち入り禁止のテープをくぐって中に入った。

「状況は？」

鑑識の男性に聞いた。

「亡くなった男性は、車内で練炭を焼いていました。一酸化炭素中毒により死亡したものと思われます」

「自殺、ですか？」

「まだわかりませんが、その可能性が強いかと」

車の中を覗き込んだ高木は後部座席に置いてある練炭を発見する。車の窓は閉め切られていたらしく自殺の可能性が高いと現場鑑識は判断していた。運転席で亡くなっているのは四十歳ぐらいの男性だ。ふと高木は男性の顔を見て何かに気づいた。

「どうかしましたか？警部」

「……この人」

男性は警視庁組対五課の警部補、土橋康隆であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2255ba/>

---

三人の犯罪者

2012年1月6日21時46分発行